

映画『剣岳 点の記』

金井健二

すばらしい映像だった。CGや空撮を駆使した映画の全盛時代に、本物の山の現場を舞台に撮影された作品である。『八甲田山』などで長年映画のカメラマンを務めた木村大作監督が自らメガホンをとったこの映画は、本物の山と自然の美しさへのこだわりを、大迫力の画面で示してくれた。圧倒的な美しい映像にまず敬意を表したい。対象が剣岳という我々にとつてまことに身近な山であるだけに、この映画を観たオールド・アルピニストは、例外なく自らの剣岳登山の経験と重ね合わせて新たな感動にひたつたにちがいない。私もその一人である。

新田次郎の同名小説の映画化であるが、陸軍参謀本部、陸地測量部の測量官とJAC登山家の剣岳の初登争いというストーリーもよかった。明治40年という時代、片や日露戦争に勝利したばかりの帝国陸軍の威信にかけて、剣岳の初登と測量を、しかも山岳会には絶対負けるなどという事実上の命令に等しい重圧を柴崎測量官に強いる参謀本部

と、一方は日本のアルピニズムの先駆者たる草創期のJAC登山家小島烏水。測量を第一の使命とし、その目的のために山に登る測量官にとつて、山に登ることを主目的とする黎明期のアルピニズムが金持ちの遊びとしてしか理解できないのも当然であろう。参謀本部の重圧と、更には決められた予算にも縛られて苦戦する測量官の前に登場する裕福なJAC登山家はどうみても敵役である。事実、雇った人夫の賃金も山岳会の方が高いという台詞も登場する。初登争いは、タッチの差で、多年の測量経験から気象条件に精通していた測量官に軍配が上がった。悪戦苦闘の末、頂上に達した測量隊が発見したのは古い錫杖の頭部であった。

測量のために、そして正確な地図を作成するという目的のための初登であるから、測量官としての本来の地味な仕事は登頂したところから始まっていたと云える。事実上の初登頂であったにもかかわらず、報告を受けた参謀本部は、頂上で古い錫杖

が発見されたという一事だけで陸軍の面子だけにこだわり、自らが与えた重圧の下で敢闘した測量官の成果をまったく評価しようとはしない。それだけに、初登争いに敗れた登山家が第2登の頂上から測量隊に送った「初登頂オメデトウ」という手旗信号がなんともすがすがしかった。初登を達成した測量隊とリーダーの測量官柴崎の栄誉の真の理解者は、それを強いた参謀本部の高官ではなく、ライバルであり敵役だった山岳会と登山家小島烏水だったというストーリーに、アルピニズムの原点を見たような気がした。まことに爽やかな感動を与えてくれる第一級の佳作だと思う。登山愛好者必見の映画である。

山を舞台にした日本映画もずいぶん観てきたように思う。映画では、『銀嶺の果て』（1947、後立山）、『富士山頂』（1948、野中至の伝記、関西登高会が撮影協力した）、『愛と憎しみの彼方へ』（1951、阿寒岳）、『氷壁』（1958、穂高、ナイロン・ザイル事件）、『黒い画集―ある遭難』（1961、鹿島槍）、『八甲田山』（1977）、『聖職の碑』（1978、木曾駒）など

があるが、新田次郎の小説の映画化作品では『剣岳 点の記』は私が観た3本目の作品である。この映画の主役でもある陸地測量部の五万分の一の地図に關しては、黒い画集は、後立山の稜線が地図の切れ目の線上にあることがキーポイントになっていた点でおもしろかった。

現在は国土地理院発行になり、カラー刷りの二万五千分の一の地図が主流になったが、私の駆け出し時代、最初に買い求めたのはこの陸地測量部の五万分の一の地図だった。当時の中学の山岳部長だった生物の先生はこれを参謀本部の地図と云っていた。神戸から心齋橋の駿々堂書店まで買いに行った。金剛山は「五条」、比良山は「北小松」などと胸を躍らせて買い入れたのを思い出す。剣、立山周辺は関西からは槍、穂高周辺より汽車の便がよかったので私にとつては北アルプス入門の山であり、つい十数年前までは、初すべりと春スキートの定番の山でもあった。ザラ峠、立山温泉など懐かしい地名や場所が登場し、中学生のとき立山温泉から藤橋まで砂防工事のトロッコ道を歩いたことが思い出された。高校2年

の夏、初めて登った剣岳の標高は当時の陸地測量部の地図では3003mだった。映画の登頂ルートは長次郎谷は大学2年の春、亡くなった山下道夫さん、田中邦彦さんと3人で下降ルートに使った。電車は粟栗野が終点で勿論ケーブルもなく、夏山の季節外れは粟栗野行きは少なく、小見駅から歩いたので剣岳はずいぶん遠かった。映画の当

時は富山駅から歩いていっているのだから更に遙かに遠い山だったに違いない。映画の感動から「私の剣岳」への脱線ついでに、蛇足ではあるが映画の中で測量官のリユックが昔愛用した中型キスリングに見えたのが少し気になった。明治40年当時にこの型のリュックが輸入されていたのだろうか？

「四国同好会」を発足

尾野益大

四国在住の会員有志が5月29日、4県の会員の親睦を深め、四国の山の魅力を広めるため「四国同好会」を発足させた。



牛の背に立つ会員

関西支部の会員8人が徳島市内で会合を開くとともに、記念登山として7月12日に高知県在住の会員とともに剣山山系の天狗塚(1812m)と尾根伝いに登った。ある牛の背(1757m)に登った。発足式には、関西支部委員経験者の白石裕さん、マッキンリ(6194m)登頂者の福成照夫さん、四国分水嶺踏査に参加した小林京子さん、滝由喜子さん、久米久夫さん、昨夏モンブラン(4807m)に登った仁田祐二さん、日本百名山を完登し北海道百名山のほとんどに登った久野博子さんらが出席。

世話人は尾野益大が務め、初めに会の目的と経緯について「四国分水嶺踏査で密になった会員の縁を絶やすことなく、輪をさらに強固にしたい」と説明。この日を選んだ理由について「ヒラリーとテンジンがエベレストに初登頂した日で、忘れにくいと思ったから」と語った。続いて全員が自己紹介をした後、尾野が重廣支部長から贈られたメッセージを手に取り「四国分水嶺踏査がこのような形で発展することに感謝申し上げます。関西在住会員との交流の継続、四国在住会員の親睦をさらに進め、日本山岳会の発展にお力添えいただきたい」と読み上げた。歓談する中で「定期的に登山をしてはどうか」という声があり、7月に天狗塚と丑年にちなんだ牛の背、10月に世界的植物学者・牧野富太郎が幼いときから登っていた横倉山(800m)と四万十川源流の不入山(1336m)に登ることを決めた。天狗塚登山には、徳島の会員5人と高知在住で昨年ヒマラヤのラトナ・チュリ(7128m)に登った山本誠治さん(京都支部)や清岡謙一さん(同)ら7



牛の背から草原状の尾根を下る会員

人も参加。1976年にラムジョン・ヒマール(6983m)登山隊長を務めた国沢鎮雄さんも登山口まで見送りに訪れた。参加者は登山中、四国同好会の意義や両県の会員の近況などを話しながら歩を進め、白いコメツツジがほぼ満開になった天狗塚に立った。前半の天気は曇り空で強風が吹いていたが、尻上がりに回復。天狗の池のほとりで昼食をとり、牛の背へ縦走して亀尻峠方面に下り始めたころには青空がのぞいた。初めてこのコースを辿った会員の感動は深く、有意義な初山行となった。